



## たね なに 種は何からできているの

### たね つく はな 種を作るのは花

この答えのためには、花の作りをしっかりと知る必要があります。花は植物にとって、最も大切な子孫を残す種を作るためのもので、その仕くみで大事なものは、おしべとめしべです。めしべの先端を柱頭、その下を花柱、元のふくらんだところを子房（種ぶくろ）といいます。子房の壁には、小さなつぶつぶがあります。これが、将来、種になる胚珠（卵ぶくろ）といわれるものです。

### たね はい はいにゅう 種は胚と胚乳からできている

めしべの柱頭はねばねばしており、おしべの花粉が付きやすくなっています。柱頭について花粉は、花粉管といわれる管をのばしていき、卵ぶくろに開いた穴（珠孔）から中に入り、卵（珠心といいますが）と受精します。受精した卵は、このときから胚とよばれます。胚はすぐ成長しはじめ、若い植物体になります。また、同時に、胚乳とよばれるものが作られます。種は、胚と胚乳とからできています。胚乳は胚が発芽するときの養分を、たくわえる役目をするものです。

### たね かず しょうぶつ しゅるい き 種の数は、植物の種類ではじめから決まっている

種ぶくろの形と、その中の卵ぶくろの数は、植物の種類で決まっています。少ないものはただ1つ、多いもので数十から数百個あります。（監修・中山 周平）

